

第 37 号
2013年 2 月発行
佐賀大学医学部
〒849-8501
佐賀市鍋島 5 丁目 1 番 1 号
http://www.saga-med.ac.jp/
新聞編集委員会
印刷/株昭和堂

退 職 教 授 挨 拶

退職を迎えて 看護教育に思うこと



看護基礎科学講座
教授
井上 範江

光陰矢の如しの言葉のように、旧佐賀医科大学看護学科設置準備から現在まで瞬く間に月日が経ったという感じがしています。平成3年、旧佐賀医科大学看護学科設置準備に向けての話し合いに、他の3名の看護系の教授

予定者の方々とともに加わり、具体的なカリキュラム作成作業では4人が集まれる土・日曜や祭日に行くこともありましたが、でも、待ち望んでいた看護学科が九州の中に作れるという嬉しさや楽しさの方が大きく、さほど苦労とも思わず、夢に向かって一生懸命看護学科の立ち上げに関わりました。平成5年4月に看護学科が開校され、私は、平成5年は兼任の辞令(当時、熊大教育学部勤務)で看護学科棟の建築設計などの話し合いにも加わり、平成6年4月に着任しました。平成8年には看護学修士課程設置

のための作業に加わり、平成9年4月に設置の運びとなりました。本看護学科は、九州・山口で、教員数などある一定の規模を有する最初の看護系大学です。それまでも、小規模な大学看護教育としては、九州では熊大教育学部の中にありましたが、のちに医療技術短大と合併し医学部保健学科に変わりました。このような大学看護教育の変遷は、米国の場合も同じなのですが、看護に対する社会の認知の変化に応じて変わってきていますので、これからは看護教育は大学教育をベースにして変化していくものと思われま

す。看護師になるには、専門的知識を習得し、基本的な技術を確実に身に付けることは先ず重要なことです。それに加えて私が大切にしてきたことは、自分の頭で物事の本質を考える力を身に付けた看護師に育ってほしいという思いです。考える力をつけてほしいという思いから、授業の中ではグループワークのための事前レポートを課しグループディスカッションやプレゼンテーションを出来るだけとり入れる工夫をしてきました。大学教育のよさは、教養教育や専門教育を担当される多くの教員の様々な考え方に接する機会が多く、その学問の持つ世界観に触れることで人間の在り方について多様な考え方や見方があることに気づくことだと思えます。そのような貴重な環境で勉強が出来る4年間を有意義に過ごして頂きたいと思



ぶどう膜炎と私
眼科学講座
教授
沖波 聡

1991年4月から佐賀医科大学に勤務し、2013年3月末に佐賀大学医学部を定年退職となります。1991年4月から2011年3月まで

に診察したぶどう膜炎患者は950人で、その中でサルコイドーシスと確定診断できたのは90人でした。また、ぶどう膜炎に伴う緑内障、高眼圧の患者は240人、330眼(25%)でした。私の学生時代は全国的に学園紛争が続き、京都大学(京大)医学部では「医局解体闘争」と称して通算1年間以上全学ストライキを行った結果、1970~1973年の卒業生は半年遅れの9月に卒業となりました。その頃は秋にも医師国家試験があり、1972年12月に京大病院眼科に研修医として入りました。当時の京大病院には専門外来が10あり、すぐにぶどう膜炎外来と緑内障外来に配属されました。それがぶどう膜炎、緑内障を主な専門領域とすることになったきっかけでした。1974年10月には助手1976年からはぶどう膜炎外来の責任者となり、以後1991年3月まで京大病院のぶどう膜炎患者を診察して来ました(途中、4年間は奈良県の天理よろづ相談所病院

の眼科の副部長でしたが、非常勤講師として月2回は京大でぶどう膜炎外来を担当しました。週1回のぶどう膜炎外来には京都、滋賀県を中心に30~50人の患者が受診し、数人で分担して診察しました。当時、京大には京大病院と別組織で胸部疾患研究所があり、サルコイドーシス患者が多数集まっていた。その人達の眼病変の有無を検査して、サルコイドーシスのぶどう膜炎について論文をたくさん書くことができました。2006年にはサルコイドーシスの診断基準が変更されましたが、眼病変の診断基準作成の委員にも選ばれました。その様なわけで、2月14日の最終講義は「サルコイドーシスのぶどう膜炎」という演題にしました。ぶどう膜炎に対する治療はステロイド薬や抗ウイルス薬、免疫抑制薬、抗TNF α 薬などによる内科的治療が主体ですが、続発緑内障、併発白内障や硝子体混濁、網膜剥離、黄斑浮腫などを伴うことが多い、外科的治療も必要になります。炎症のある眼には眼内レンズ手術は禁忌、緑内障手術も消炎するまではダメと言う時代もありましたが、それらのタープに挑戦して

来しました。硝子体手術もぶどう膜炎治療に導入しました。ぶどう膜炎の患者数は限られますので、当然ながら他の疾患で眼内レンズ手術、緑内障手術、硝子体手術を多数行った上で、その経験をぶどう膜炎患者の治療に応用して行きました。この様に、一人で内科的治療と外科的治療を行うことができるのが、眼科の魅力の一つです。ぶどう膜炎だけに限りません。中途失明の原因の第一位である緑内障でも薬物治療が無効であれば手術治療を行います。近年、増加している加齢黄斑変性には以前は手術治療を行っていましたが、近頃は薬物治療が主流となりました。しかし、大量の硝子体出血や網膜下出血を来すと硝子体手術の出番となります。糖尿病網膜症など種々の眼疾患に伴う黄斑浮腫に対しても薬物治療と硝子体手術を行って行きます。全国的に眼科医になる人が減少しています。目が見えないことはQOLにとつて大きな障害となります。良好な視力を保った長寿社会を目指して、内科的治療と外科的治療を行うことができる眼科を選ぶ人が佐賀にも増えることを願っています。

平成25年3月31日で佐賀大学を定年退職いたしました。私は昭和59年10月に久留米大学から当時の佐賀医科大学へ病理学助教として赴任以来約29年間勤務したことになりました。筑後川を渡れば佐賀市まで車で30分も要しませんが、当時佐賀のことはほとんど知りませんでした。しかし住めば都で佐賀のことを知れば知るほど愛着が湧き、佐賀大学に勤務できたことを誇りに思います。久留米大学での10年を含めて約40年間の病理医としての思い出を記して退任の挨拶といたします。司馬遼太郎の言葉を借りれば、佐賀鍋島藩主は江戸後期~幕末にかけて全国300諸侯の中でも有数の近代教育行政を行い、その結果明治初期には大隈重信や江藤新平など各省の礎石となる多くの役人や軍人を輩出している。医療面でも神埼出身の伊東玄朴は日本で初めて種痘(牛痘)を行っている。医療面でも神埼出身の伊東玄朴は日本で初めて種痘(牛痘)を行っている。天然痘の予防に成功し、後に江戸に出て徳川幕府の奥医師(将軍の侍医)をつとめ、また東京大学医学部の発祥の地となる「お玉が池種痘所」を開

病理解40年の歩みを振り返って



病態科学講座
診断病理学分野
教授
徳永 蔵

来しました。硝子体手術もぶどう膜炎治療に導入しました。ぶどう膜炎の患者数は限られますので、当然ながら他の疾患で眼内レンズ手術、緑内障手術、硝子体手術を多数行った上で、その経験をぶどう膜炎患者の治療に応用して行きました。この様に、一人で内科的治療と外科的治療を行うことができるのが、眼科の魅力の一つです。ぶどう膜炎だけに限りません。中途失明の原因の第一位である緑内障でも薬物治療が無効であれば手術治療を行います。近年、増加している加齢黄斑変性には以前は手術治療を行っていましたが、近頃は薬物治療が主流となりました。しかし、大量の硝子体出血や網膜下出血を来すと硝子体手術の出番となります。糖尿病網膜症など種々の眼疾患に伴う黄斑浮腫に対しても薬物治療と硝子体手術を行って行きます。全国的に眼科医になる人が減少しています。目が見えないことはQOLにとつて大きな障害となります。良好な視力を保った長寿社会を目指して、内科的治療と外科的治療を行うことができる眼科を選ぶ人が佐賀にも増えることを願っています。

平成25年3月31日で佐賀大学を定年退職いたしました。私は昭和59年10月に久留米大学から当時の佐賀医科大学へ病理学助教として赴任以来約29年間勤務したことになりました。筑後川を渡れば佐賀市まで車で30分も要しませんが、当時佐賀のことはほとんど知りませんでした。しかし住めば都で佐賀のことを知れば知るほど愛着が湧き、佐賀大学に勤務できたことを誇りに思います。久留米大学での10年を含めて約40年間の病理医としての思い出を記して退任の挨拶といたします。司馬遼太郎の言葉を借りれば、佐賀鍋島藩主は江戸後期~幕末にかけて全国300諸侯の中でも有数の近代教育行政を行い、その結果明治初期には大隈重信や江藤新平など各省の礎石となる多くの役人や軍人を輩出している。医療面でも神埼出身の伊東玄朴は日本で初めて種痘(牛痘)を行っている。医療面でも神埼出身の伊東玄朴は日本で初めて種痘(牛痘)を行っている。天然痘の予防に成功し、後に江戸に出て徳川幕府の奥医師(将軍の侍医)をつとめ、また東京大学医学部の発祥の地となる「お玉が池種痘所」を開



天山おろこ

自宅から鍋島キャンパスまでの片道47キロ、三瀬越えのマイカー通勤を始めて早や2年が経った。山間部にはさすがに多数の野生動物が生息しているようであり、深夜の帰宅ともなればタヌキ、アナグマ、イタチ、テン、時にはイノシシの親子など、バラエティに富む動物種にしばしば遭遇する。いづれは不幸にも事故で息絶えたであろうアナグマの死骸の傍らに、もう一頭のアナグマが寄り添って鼻を擦り寄せている光景を目撃した。つがいであったとすれば、伴侶の突然の死に為すべもなく茫然と佇んでいたのだろうか。自身が同様な立場に置かれたことを想像すれば、なんとも同情の念を禁じ得なかつた。さて、日頃このような経験を繰り返している、一定の法則らしきものには気が付く。動物たちとの遭遇はある一定の地点に集中する傾向があるのだ。当て推量ではあるが、そこでは人間が作った道路と、動物たちのけものみち(獣道)とが交差しているのではないだろうか。実際に、けものみちが地図に記載されることはないが、これが人間の道路上を横切るように点線で示されるのを想像するのはなんととも愉快である。このように我々の視界の中に日常的に存在しているのにもかかわらず、気付かれない事象というのは意外と多いのかもしれない。数年前、廣川信隆東京

自宅から鍋島キャンパスまでの片道47キロ、三瀬越えのマイカー通勤を始めて早や2年が経った。山間部にはさすがに多数の野生動物が生息しているようであり、深夜の帰宅ともなればタヌキ、アナグマ、イタチ、テン、時にはイノシシの親子など、バラエティに富む動物種にしばしば遭遇する。いづれは不幸にも事故で息絶えたであろうアナグマの死骸の傍らに、もう一頭のアナグマが寄り添って鼻を擦り寄せている光景を目撃した。つがいであったとすれば、伴侶の突然の死に為すべもなく茫然と佇んでいたのだろうか。自身が同様な立場に置かれたことを想像すれば、なんとも同情の念を禁じ得なかつた。さて、日頃このような経験を繰り返している、一定の法則らしきものには気が付く。動物たちとの遭遇はある一定の地点に集中する傾向があるのだ。当て推量ではあるが、そこでは人間が作った道路と、動物たちのけものみち(獣道)とが交差しているのではないだろうか。実際に、けものみちが地図に記載されることはないが、これが人間の道路上を横切るように点線で示されるのを想像するのはなんととも愉快である。このように我々の視界の中に日常的に存在しているのにもかかわらず、気付かれない事象というのは意外と多いのかもしれない。数年前、廣川信隆東京

大学名誉教授の講演を拝聴する機会があった。同氏はニューロンの軸索輸送に係わるKIFタンパクファミリーを続々と発見した高名な解剖学者・細胞生物学者である。講演の冒頭で軸索内部の電子顕微鏡写真が出て、「これは30年あまり前に撮影したが、今から思うとすべての答え(KIFファミリー)はこの写真の中にあつた」と述懐しておられた。もちろん通常の電子顕微鏡の分解能で、多様なタンパク質を区別して可視化できるわけではない。しかし講演を聴いている身には強く印象に残る一節であつた。ノーベル医学生理学賞を受賞したアルベルト・セント・ジヨルジ博士は「発見は、ほかの誰かが見たものを見て、ほかの誰かが考えなかつたことを考えることによつて生まれる」と述べている。新しい発見というものには実は我々の身の回り、ラボで得られるありふれたデータ、あるいは日常の診療で出会う患者さんの中にひっそりと隠れているものであり、それを見いだせるかどうかは我々の姿勢次第なのかもしれない。様々な所見や現象を、当たり前の一言で片付けるのではなく、常に好奇心を失わず多角的な洞察を加えることは大切である。ただし、そもそも見えていないものがある。それ以前の問題である。常日頃から観察力を研ぎ澄ませておくことも忘れてはならない。大学で様々な観察実習が行われるのは、一つには観察力の醸成のためなのである。(倉岡)

(1面からの続き)

「1面からの続き」
 いる。日本の赤十字の前身は佐野常民が西南戦争で設立した「博愛社」で、その生家は佐賀大学の近くにある。産業面でも先進的で、放射式溶鉱炉を作り洋式鉄砲や蒸気船なども製造している。東京の「お台場」は佐賀で製造されたアームストロング砲を据え付けて、上野の山に立て籠もった旧幕府軍を攻撃して壊滅したことで知られている。

赴任当初は斬新な教育カリキュラムと合理的な教育制度に戸惑ったが、慣れてくるとその良さが分かった。例えば私の専門は病理学だが、基礎としての病理は総論のみの講義・実習として編成され、各論は臨床の臓器を主体とした臓器別カリキュラムに組み込まれている。その後数次の変遷を経て現在のPBLを主体とした教育に移行したが、基礎教育を前倒して圧縮したために基礎医学の修得が不足し、医学生として重要な疾病の病態と生理の理解が不十分なまま臨床教育や臨床実習に進んでいるように思われる。最近の医師国家試験成績低迷の一因ではないかと危惧している。現在医学教育カリキュラムの見直しが行われているが、医学を良く理解した教職者が立案し、幅広いコンセンサスを得てかつ長期展望に立った改訂が望まれる。要はどのような医師を育てるかということに尽きるわけだが、本学においては教育ボリ

シーとして地域医療に貢献できる医療人育成が謳われていることから、学生諸君も初心を忘れずに自分の目標を立てて勉学に勤しんで欲しい。

私の専門である病理学分野では病理医師不足が深刻で専門医は全国でも2050名に過ぎない。特に佐賀県は7〜8名と最も少なく、鳥根県と最下位を争っている。臨床から基礎へ研究にやってくる医師は修了すればやがて臨床に戻るが、何とか病理仲間を増やしたいと願ってきた。私自身は最初1年外科系臨床に従事した後、病理大学院に入りそのまま病理医を続けた。病理医として生きていくことを決断する際には、患者さんと直接接する機会はなくならない。臨床を離れることに一抹の不安と寂しさを禁じ得なかった経験から積極的に勧誘はしなかった。しかし佐賀大学でもそのまま病理に残って病理専門医になりたいと相談を受けるようになり、私が教授になってから20年間に笹富君を初め、山崎、森、高瀬、木戸、甲斐、増田、明石君など多くの優秀な人材が病理に残ってくれたことは大変嬉しい。今後佐賀大学出身者が九州・山口・沖縄の病理医として活躍する時代が来るだろうと期待している。

一方、当教室出身者が米国で、あるいは留学生として来日して帰国後、病理医として活躍している事も特記すべきことであり紹介したい。笹富君

啜啄

分子生命科学講座 教授 木本 雅夫



「2012年夏、 Suffolk University メディカルセンター前にて」

「啜啄同時」という禅

宗の有名な言葉がありまして。「啜」とは、雛が生まれ出ようとして卵の殻を内側からつづくこと。「啄」は、親鶏が卵の殻を嘴でつつき破って、雛が孵るのを助けることです。「啜」と「啄」が同時におこなわれることが大切で、タイミングを誤った「啜」だけでは力不足、「啄」だけでは準備できていない卵が壊れて雛は死んでしまいます。

この「啜啄同時」という言葉は、学校のみならず家庭、社会での教育の真髄を比喩的に教えています。教員と学生、親子、指導者と被指導者の想いと行いが合致した時に、はじめて教育が成り立つというものです。人間の場合はさまざまな場面でも、さまざまな方法で人となることも期待される。若い諸君は世俗的な事柄に惑わされる事無く、大きな夢を持って医学の世界に羽ばたいてくれることを期待したい。諸君「鶏頭となるも牛後となるなかれ」

限度でしよう。通常の授業で殻から出てくる学生は非常に意欲があり優秀で、そのときの教員はインパクトの強い上手な授業をしているといえます。

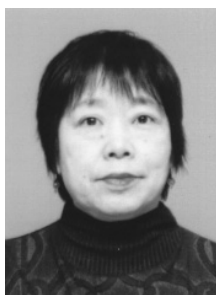
一羽の雛にとつて孵化は一回きりですが、一人の学生にとつてはいくつもの孵化(授業科目)があります。また、卵の孵化はほぼ一瞬ですが、教育は長い時間のゆとりが設けられています。ミニマム知識習得(通常の授業)の「啜啄」では、失敗しても繰り返すことができる(再試、留年)仕組みが設けられています。しかし、可能な限りお互いに一回で済ませたいものです。

親鶏は抱卵とその後の育雛に多大の精力と時間を費やしますが、それ以外の活動として、餌を探して食べる(研究や診療)こと、仲間との共同生活(学会活動など)、外敵や自然の脅威から身を守る巣作り(管理運営)も必要です。これらは卵の中の雛(学生)にとつては知ることが出来ない親の活動ですが、これらも、究極的には子孫を残す(後継者を育てる)ためであることを、学生も教員も共に理解する必要があります。

卵から孵った雛は、最初は親鶏から給餌(初期研修など)されますが、そのうち自ら餌を探して食べるようになります。一人前の大人に成長し、やがて、自ら卵を産み温め孵すよう(指導者)になります。知識・技術と倫理が次世代に引き継がれ、

その過程で研究や診療活動による新しい発見や進歩を伴うことが、鶏の世界には無い人間の素晴らしさです。学生の「啜」

佐賀の地に誘われて



母子看護学講座 教授 斉藤ひさ子

平成12年に佐賀医科大学看護学科に着任しました。前任地の山口県立大学からは看護学部長の推薦もいただき、臨床看護学講座・母性看護学の教授として選考していただいたのですが、完成年度を迎えていないというところでストップがかかり、1日も早い着任を願いながら業務に携わっていたところ、「もう出してあげなさい」という学長の声により、11月赴任に至りました。

私は助産師として母性看護学・助産学を専門分野とし親子・家族関係を探究してきました。その原点は中学時代に遡ります。私たちの年代は団塊の世代と言われ、第1次ベビーブームに生まれまわった。小学校ではその対応が間に合わず午前・午後2部授業を経験し、中学校は現代のゆとり教育とは対照的ともいえる60人15クラスという、教室の後ろまでぎっしり詰め込まれた学習環境で教育を受けました。この膨れ上がった教育現場には、大学を卒業したばかりの、理想に燃えた若い先生方が多く採用されています。恩師である国語の大家屋百合子先生は、「克己」という言葉と、女性が賢く生きることの大切さを教えて下さいました。また、読書を強く薦め、自分の持っている蔵書を開放して下さったので、帰宅中に先生の下宿にお邪魔して、大量の図書をお借りし、むさぼるように読んでいたことを覚えています。その中で、深い感銘を受けた一冊が「次郎物語」です。生母の母乳が出なかったため、主人の次郎が家族と離れ、里子として乳母のもとで幼年期を過ごす物語で、思春期にあった私は、親と子の絆について深く考える契機になりました。結婚で病床に臥し療養している生母お民さんが乳母のお浜さんと再会して発した言葉は、50年たった今でも忘れられないほど強烈なインパクトを残しています。「子どもってただかわいがってやりさえすればいいのね。」進路について先生に相談した時には、妊娠中毒症(妊娠高血圧症候群)で入院した、ご自身の体験から、助産師が女性のために一生をかけていく価値のある専門職であると強く後押しして下さった結果、私は助産師を志向し今日に至っています。

佐賀とは不思議なご縁で結ばれ誘われてきたように思います。着任した佐賀で、私は中学時代に感銘を受けた「次郎物語」と再会したので。作者・下村湖人の生地が神埼であり、この物語には佐賀の風土が大きく反映されていることを初めて知りました。「子どもってただかわいがってやりさえすればいいのね。」という言葉に、湖人が伝えたいたすべてが凝縮された、読書を通じて、次郎とはまるでかけ離れた時間や生活環境で育ってきた現代の学生たちにも、親子関係の原点や家庭のあり方を振り返らせる力をもっているように感じました。看護学科の在任期間中、4回の教育カリキュラム改正を経験しましたが、その過程で、私はこの題材を用いて、主題科目「次郎物語に見る佐賀の生活と家族」を本庄キャンパスで開講し、グループ討議を重ねながら教育者として深めていくという、大変興味深い時間をもつことができました。また、看護学科においては、専門選択科目「親と子の発達論」を開講しました。次郎物語のビデオを通して、エビデンスに基づく育児や地域、文化や伝統の文脈で作り上げていく子育ての大切さを看護学生と共に考えてきました。佐賀

科目の開講を思いつくともなく、地域に結びついた教材を共有して、学生と学び合うこともなかつたかもしれせん。本当に有意義な経験をすることができたと、感謝しています。親子関係の発達については、これからもライフワークとして継続し考察していくつもりです。少子化が進む中で、親子関係のあり方は、これからますます重要性を増してきます。自分の専門領域に関わらず、親子や家族を暖かくサポートできる看護職者でいてほしいと希望します。機会があったら「次郎物語」を是非、読んでみてください。

これまで助産師・看護教員として私を支えてくれた力の源は、看護学生のひたむきに看護を学ぼうとする姿でした。また、臨床で出会う赤ちゃんやお母さんの笑顔であり、心構えを正してくれた歌、母性という言葉あくまで抽象のものとしてある二十歳の五月、教室にそれぞれ時充たしおる九十二個の目玉と私

この子らを好りし日の母のことふと思つ試験監督しつ

*俵万智・サラダ 記念日

在職期間に支援していただいたすべての方々に感謝し、佐賀大学医学部の発展をお祈りします。

新任教授 挨拶



放射線医学講座
教授

入江 裕之

皆さん、こんにちは。平成24年8月1日付けで佐賀大学医学部放射線医学講座の教授に就任しました入江裕之です。この場を借りて学生の皆さんに自己紹介と当教室の紹介ならびに放射線科医の仕事について説明したいと思います。

私は昭和61年に九州大学医学部を卒業し、九州大学放射線科に入局しました。その後、九州大病院およびその関連病院で研修し、放射線科専門医を取得した後、平成4年から2年間、米国アイオワ大学に留学し、腹部診断グループの一員として臨床に携わりました。帰国後は九州大病院に断とIVR(画像介入下治療)の診療と研究を行ってきました。専門は

肝・胆・脾のCT・MRI診断です。佐賀大学には平成19年11月に准教授として赴任し、昨年9月に工藤祥前教授が九州国際重粒子線がん治療センターのセンター長に就任されたため、約1年の教授不在期間を経て、4代目の教授として就任する運びとなりました。

当教室は昭和56年4月に松岡順之介初代教授以下6名のスタッフで開設され、今年で32年目をむかえています。現在の定員は教授1、准教授2、講師2、助教5、医員5で、平成23年4月に開設された寄付講座の重粒子線がん治療講座の教授1、助教2とあわせ、18名で教育・診療・研究にあたっています。関連病院は8病院で、現在12名が出張しています。大学

影は技師さんによって行われますが、適切なプロトコールで撮影されていないと、せっかく検査をしても欲しい情報が得られず、正しい診断や除外すべき疾患の鑑別が出来なくなってしまう。診療科医師からの検査依頼文をもとに検査の組み立て・指示を行い、撮影された画像を読影、画像診断報告書を作成、というのが一連の流れです。胸部レントゲンのようなスクリーニングの要素の強い単純写真の読影も、病院全体の医療安全にかかわる重要な任務です。このほか、他科の術前・術後カンファレンスに出向き、治療方針の決定に関わったり、今後の診断へのフィードバックを受け取ったりすることもあります。また、血管造影及びIVRを専門にするスタッフも診断医に含められます。放射線腫瘍医は、診察や画像等の検査により、全身状態や病変の進展範囲等の把握をした上で、治療計画を行います。具体的には治療範囲や線量分布(放射線の当たり方、治療スケジュールなど)を決定します。治療範囲等はCT画像をもとに三次元的に決めていきますが、MRI・PETなどの画像も参考にします。通常の外部照射には5〜7週間かかりますが、その間の診察や経過観察も行います。小線源治療においては、患者に小手術的介入も行うことがあります。放射線腫瘍医は、自分の得意分野が持てる専門性が高い領域であることと、臓器にとらわれ

ず全身や患者さん自体をみることに、一見矛盾する2点を満たせる仕事ができます。他診療科医からも専門家として尊重されますし、(血をみることなく)がんが治って患者さんに感謝されることはとても嬉しいことです。佐賀県では診断、治療に関わらず放射線科医がまだまだ不足しています。一方で、放射線科医の需要はこれからますます増加すると予想されます。臨床科に信頼され、患者さんのためになる放射線科医を1人でも多く育てることに、それが私の使命であると考えています。当教室のモットーは「明るく、楽しい放射線科」です。学生の皆さんも放射線科の読影室を是非のぞいてください。明るく、楽しい放射線科が実感できると思いますよ。それでは、講義や実習などでお会いしましょう。

佐賀大学医学部放射線医学教室ホームページ
<http://www.radiology.nedsaga-u.ac.jp/>



産科婦人科学講座
教授

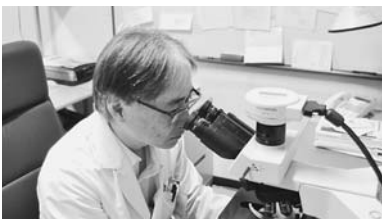
横山 正俊

平成24年10月1日付けで産科婦人科学の教授に就任いたしました横山正俊です。私は、佐賀医科大学に1978年、一期生として入学しました。入学当時は、現在の講義棟が無く、在学中ずっと工事が続いていた印象です。現在、病院再開発で工事が始まっています。が、在学中を思い出します。何もなくだったので、その代わり次々と大目を出上りがついでに新鮮でした。机も椅子も最初に使いはじめ、病理実習の時も顕微鏡を真新しい箱から出して、初めて電源を入れたことを覚えていました。体育館も後でできたので、入学式はある殺風景な広い部屋で行われたのですが、実習

が始まり、解剖室だったことが判明しました。学園祭は大学2年生のときに始まりましたが、勢いでこの医学部新聞(Mudskippers)と同じ「むつころう祭」と名付けてしまったのでした。テニスコートだけあったので、当初学生100人中テニス部員が30名以上はいたと思います。体育館やグラウンドができると一斉に運動部が創部され、現在に至っています。私もバドミントン部に関わりました。すべてが最初だったので、試験もどんなものかわからないので、とにかく手を抜くことができませんでした。現在は、過去問が充実しているようで、昨年の卒試に新作問題を多く出したところ、例年より平均点が10点以上上がりました。産婦人科は今後も新問題が出るので学生の皆さんは要注意です。

1984年に無事卒業し、いろいろあつて産婦人科に入局しました。現在は2年間の猶予期間があるのでじっくり考えて入局を決めることができますが、当時は勢いで入局しました。その後、結果として大学に30年近くも残ることになり、現在に至っています。

専門は、婦人科腫瘍でとくに子宮頸癌とHPVの研究に携わってきました。この研究は、私が丁度大学を卒業した1980年代前半から始まり、現在HPV予防ワクチンによる子宮頸癌予防やHPV検査を併用した子宮頸癌検診の導入(佐賀市の検診にも導入済み)となつて実を結びつつあります。これらの発展に結びついたとして、HPVと子宮頸癌の関係を最初発見したドイツのハラルド・ツール・ハウゼン博士は、2008年にノーベル医学・生理学賞を受賞されています。約20年前の留学中の研究テーマは、「HPVによる子宮頸部の発癌モデルの作成」でした。基礎研究か



細胞診を行う横山教授



精神医学講座
教授

門司 晃

平成24年11月1日から精神医学講座を担当することになりました門司晃です。どうぞ宜しくお願いいたします。出身は福岡市と北九州市の中間にある宗像市というところですが、地元中学卒業後にラサール高校に入学し、鹿児島で3年間を過ごしました。高校卒業後は東京の工学系の大学に進学しましたが、訳あって、郷里の九州大学医学部に再入学し、同大学を卒業後に精神科医となりました。早いもので、医師となつて四半世紀以上が過ぎたことになりました。

現役生からみると、4年遅れで医師になったこともあり、外科系への進路選択はあまり念頭になく、漠然と内科系の進路を選択を学生時代から考えていました。内科系の中で、放射線科、神経内科、精神科あたりを考えたのが6年生になったところで、そのなかで精神科を選んだ確たる理由はなかったと思います。多分、高校時代の同級生も既に何名の私の使命と考えています。なお、大学でもHPV予防ワクチンは接種できますので、ご希望の方は私まで御連絡ください。佐賀医大出身ということで、同窓の先生からの期待も強く感じています。どうぞ、これからもよろしくお願いたします。

私が医師になったころは、大学医局に入局し、それぞれの専門分野の医師としての修練を積むのが一般的でしたが、今は制度が変わり、大学医局に入らない選択も一般的となりました。今大学にいる立場なので多少割り引いて受け止めてもらって構いませんが、まずは母校を含む大学医局に入局して専門医等を取得失その科のいわゆる「業界事情」をある程度知った上で、将来の落ち着き先を決めたほうがいいように私は思います。精神医学についての話をしますと、心理学的アプローチから神経科学(ニューロサイエンス)的アプローチまで、文系的立場から理系的立場まで、色々な考え方をうまく融合させて、診療実践を行うところに他の科にないユニークさがあると思います。私自身は神経科学的な研究を専門としていますが、目前の患者さんの治療を行う上では、一方の立場からだけでは偏ったアプローチには限界があることを痛感しています。世間的にも「メンタルヘルス」の重要性がしばしば指摘されますが、精神医学に興味のある方は何時でも医局を尋ねて来て下さい。歓迎いたします。皆さんが有意義な学生生活をおくれることを祈念して、私の就任挨拶いたします。



12月20日、病院クリスマスコンサートが佐賀大学付属病院一階ロビーで開催されました。これは病棟イベント企画ボランティアサークル SMILE が企画し、室内楽部と混声合唱部の皆さんの楽器演奏や歌をとおして、入院患者さんにクリスマスの雰囲気を感じてもらおう催しです。サンタやトナカイのコスチュームを身にまとった学生さんが車いすボランティアとして雰囲気を盛り上げる中、天井のクリスマス風ライトが幻想的な光を放つ病院ロビーには、待合椅子が埋まるほど大勢の患者さんが集まりました。ほんの一時間あまりの短い時間でしたが、最後に患者さんも含めて全員で「きよしこの夜」を合唱し、楽しくも暖かい余韻を残しながら恒例のクリスマスイベントは幕を閉じました。(岩永)



混声合唱部のクリスマスイベント

混声合唱部は部員約15名で、様々なジャンルの歌を楽しんでいます。主な活動行事は秋の学園祭での定期演奏、そして毎年12月、病院で行っているキャロリングとクリスマスコンサートです。

キャロリングは耳慣れない言葉かもしれませんが、白衣を身にまとい、キャンドルを手に聖歌を歌いながら病棟をまわるイベントです。歩きながら歌うのは意外と難しいのですが、合唱部員でなくとも参加できます。幻想的なキャンドルの光の中、熱心に聴き入ってくださる患者さんの姿は私たちを暖かな気持ちにしてくれます。

クリスマスコンサートは病院ロビーをステージとし、室内楽部と協力して演奏を披露します。病棟に一足早いクリスマスを、という趣旨で、クリスマスソングを中心に皆が楽しめるプログラムを準備しています。一緒に歌ってくださいたり、涙を流して聴いてくださる患者さんを見ると、歌の持つパワーや素晴らしさにあらためて気づかされます。

授業以外で患者さんと触れ合う機会はめったにありませんが、このような貴重な体験をできるイベントに多くの学生さんが参加され、さらに盛り上げていければと願っています。

混声合唱部の部員はほとんどが兼部で、多忙な方でも無理なく活動できます。初心者やピアノ伴奏希望者も大歓迎です。歌が好きな人、音楽を楽しみたい人、気軽に声をかけてください。

(部長 医学科3年 藤吉直子)



混声合唱部の練習風景



編集後記

昨年末、前任の戸田教授より編集長の要職を引き継いだ。私事ではあるが、家内がある広報誌の編集に従事しており、奇遇にも夫婦共々同じ仕事に携わることになった。メロウな声、唸りながら大量の原稿と格闘する家内の姿を自分に重ね合わせる。正直、重たいところではあるし、浅学で文才に欠ける身に務まるかという懸念もある。しかし誰かがやらねばならない仕事である。アカデミックな香り満載の戸田教授のカラーを継承しつつ、本学生新聞の本来の目的である学生同士、教員と学生の円滑な交流、さらには鍋島キャンパスの活性化が達成できるよう、微力ながらも誠心誠意努力したい。学生諸君の積極的な投稿、そして編集への参加も期待してやまないところである。なお本年度をもって退職される分子生命科学講座・木本雅夫教授は、本学生新聞の初代編集長として活躍された。十年間の歴史の礎を築いて下さった御尽力にあらためて感謝の意を表したい。

さて、本号の特集記事、退職教授・新任教授挨拶には、講義・実習を受けるだけでは知り得ない先生方のお人柄、バックグラウンド、教育・研究にける情熱、そして学生諸君への力強いメッセージが凝縮されている。卒業後の人生の指針として、学生諸君にも大いに参考になることを確信している。ぜひ一読をお願いしたい。(倉岡)

新聞編集委員

倉岡晃夫教授(編集長)
河野 史教授、尾崎岩太准教授、
徳田悠希子(研修医1年)、野上
愛、吉田紀子(医6)、森下さくら、
草場香那、牟田口真理(医5)、壹
岐聡一朗、合田夏希、鈴木源晟、
橋本健太(医4)、尼寺那佳子、沖
藤悠貴、中道あずさ、藤井玲衣奈
(看4)、竹藤徳子、溝内絢子、坂
井美月(看3)、岩永鴻之介(医2)
要望などの連絡先
学生サービス課総務
gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp

